

飯岡車塚古墳発掘調査報告

〔周溝部調査〕

1976

田辺町教育委員会

北



南

飯岡全景写真

〔 序 〕

田辺町飯岡字西原のこの地は、昭和50年田辺町が行なった車塚東側町道拡張工事の舗装にともない今回の調査を実施することになりました。

調査にあたっては、田辺町教育委員会が主体となり六勝寺研究会吉村正親氏を調査担当者として実施いたしました。調査の結果は、本報告書で詳しく述べましたように、河原石を斜面に敷き詰めた葺石の発見が第一で、後円部を20mの長さでグルリと囲んでいました。このことで古墳の規模は従来考えられていたより周囲4mずつ大きくなることがわかりました。なお調査地は、古墳に隣接した町道で行なわれ、調査にあられた方々には大変なご苦勞をおかけいたしました。ここにあらためて厚くお礼申し上げます。

本書が町民の皆様をはじめ広く一般の方々の文化財に対する認識を深める端緒となり、あわせて地方史研究にいささかでも役立てば幸いです。

昭和52年3月

田辺町教育委員会

教育長 籾 下 撤 一

例 言

1. この報告書は、田辺町建設課が行なったもので町単独実費負担とし諸氏の奉仕的活動によって成った。
2. 本書の執筆、編集は、六勝寺研究会調査員吉村正親が行ない、トレース、実測遺物の表は、同志社大学生福島雅儀が行ない、手助けを京都教育大学考古学研究会山口博が行なった。
3. 本書に使用した車塚古墳全景測量図は、竜谷大学考古学資料室の諸氏が作成されたものを借用した。

目 次

I 庶務的事項	1
II 遺跡の環境と現状	2
III 発掘調査日誌	3
IV 遺構の調査経過	5
V 遺 物	6
VI 小 結	7

I 庶務的事項

1: 調査主体	田辺町建設課 代表田辺町々長	原 田 喜代次
調査指導, 会計	田辺町教育委員会主事文化財係	奥 田 清 田 辺 宗 一
顧問	六勝寺研究会代表, 日本考古学協会々員	木 村 捷三郎
調査担当者	六勝寺研究会調査員	吉 村 正 親
補助員	同志社大学	中 村 重 夫 福 島 雅 儀
	大阪経済法科大学	原 田 昌 則
	京都教育大学	増 春 喜 則
	京都府立城陽高等学校	石 川 稜

2: 調査に至る経緯

昭和50年度に田辺町建設課が行なった、飯岡車塚古墳東側道路拡張工事によって墳丘の一部を破壊、この時点で京都府教育委員会より発掘調査を含む、保護の必要を指示され工事を中断、ただちに予算化を急いだ。予算化は、田辺町建設課によってなされ実現した。調査の指導、委託は、田辺町教育委員会が行ない、六勝寺研究会調査員吉村正親に依頼した。吉村は依頼を受けたただちに三者による話し合いに入った。そこで協議により調査は、吉村が専念し、事務庶務会計は田辺町教育委員会が行ない、器材、掘穿重機等は建設課が行なうことにした。

発掘調査は、昭和51年3月21日～4月5日まで行ない。以後、遺物整理、報告書作成を行なった。

3 出土品は、田辺町中央公民館内で教育委員会が保管し、調査記録は、調査担当者が保管した。

II 遺跡の環境と現状

山城盆地の中心を巨勢池干拓地であるとするなら、南山城と言われる地域の中心に位置するのが飯岡である。この丘陵は、木津川を越えた東側に位置する井手台地より分離して独立丘陵となったと考えられる。それゆえに山頂に立つと360°の遠望ができ、一大パノラマを見ることができ、まず東に木津の流れを見、南には、山本駅で有名な山本の部落を見下せる。ここから木津川を渡って東海・東山道と、中国地方山陽道の分岐点となった。その時いつも旅人は、飯岡を仰ぎ見たのである。西は、普賢寺川とその出口の丘陵上に弥生第四様式に入る、天神山遺跡、北方に草内の集落、遠く京都タワーを望み、南遠く若草山を見ることがもできる。この独立丘陵上には、丘頂が二つあり、その二つは東側を薬師山古墳、西側をゴロゴロ山古墳と言う古墳である。いずれも発掘調査はされていない。この二つの古墳の東斜面を下った所で、第五様式?の住居跡があった。参加各氏の話によると、半壊の住居で周囲に小ピットがめぐる円形であったようで、住居の外には、土器を焼成したと思われる土壇状の部分もあった。そして付近で太形蛤刃石斧も出土しているのでもっと古い遺構も望めそうである。古墳時代に入ると高所より周辺へと順に古墳が築造されて行ったと見え、先述した二円墳の他に調査をした車塚古墳、半壊トツカ古墳（字鎮座山）と塚穴（横穴）や、名前のみ残っている古塚、馬塚、狐塚、経塚、福塚、塚も存在していたようである。さて飯岡車塚古墳であるが、この丘陵の西端に位置し、美しい茶園に包まれている。まず、東側、西側の前方部にテラスの平坦地を持っており、後円部が前方部に比して大きく高い。古墳の東は一つ谷を隔てて台地になっており、飯岡集落南側と一周する幹線道路である。

Ⅲ 発掘調査日誌

昭和51年3月21日～4月

3月21日 くもり時々小雨

12時・明日から道路面ユンボ掘穿に先立ち、吉村・奥田で、トレンチ設定。南より順次北へ、A・B・C・D・E・F・Gの7つを10m間隔で設定した。現状の写真撮影。道路の全面通行止めを行なう。

22日 AM.9.00よりユンボ、Gトレンチより掘穿開始、PM.になって人力を導入、排土を行なう。中世期の羽釜や埴輪片多数出土。

23日 くもり時々雨

AM.中に雨足が強くなったため作業を半日で切り上げ、検討会を開く。

24日 晴れ

Gトレンチにおいて、東に傾斜をもつ石列(葺石)を発見、F・Eトレンチでも確認した。

25日 晴れ

木村捷三郎顧問見学。意見を聞く。

26日 石列は、最下段の葺石列であることを確認、石の組み方は、底石に30cm大の川原石を使い西に傾斜しながら積んでいる。

27日 雨 中止

28日 晴れ

雨の後のためトレンチ内が汚れていたため石列の精査兼清掃を行なう。

海拔67mの一等三角点(ゴロゴロ山々頂)よりグラウンドレベルを出すため、B.M.40mポイントを作り出した。昼休み中、中期大型古墳、久津川車塚古墳周溝調査の見学を行なう。

29日 くもり後雨

G・Fトレンチの写真撮影終了。実測のためにポイント設定を行なう。

30日 雨のため作業中止

31日 晴れ

断面・平面の遺構実測を始める。B・Cトレンチを完了。

木村顧問見学指導。京都府教育委員会技師、平良久氏見学。

4月1日 晴れ

最重要部分、G・F・E各トレンチ実測にかかる。Gトレンチは完了。

原田 喜代次 田辺町長見学。

2日 くもり

実測，E・Fトレンチに集中する。

3日 くもり

平面図・断面図共に完了。E・F・G各トレンチの写真撮影も行なう。

4日 晴れ

期間も予定どおり，本日中に調査を終了すべく，平板実測 1/300・1/100 を取り，断面図の総チェックを行ない，断面に入っている埴輪片の採集にかかる。するとGトレンチ東側断面の中，水路コンクリートの下に三段の帯をめぐらす楕円埴輪を発見，位置，写真を取り採集。全調査完了。

昼間，近江考古学会，京都府文化財保護財団の人々の見学があった。

後日，発掘資材，遺物等を，奥田，田辺両氏より田辺町中央公民館資料室に運搬，以後，報告書作成に至る作業を継続して，この場で行なった。

IV 遺構の調査経過と事実報告

発掘に際しトレンチを道路と同一方向に設定した。故に磁北に対し、東へ28°傾いた一直線上に乗ることになった。図面その他も28°傾いたまま記入した。名称は、南から北へ向ってA～Gの7トレンチあって、10mを離すグリッドとした。と言うのも全面掘りにすると両サイドの壁が倒れ危険なためである。

A・B・Cの各トレンチについては、旧道路の直下に地山が検出され、遺構はすべて削平されていた。これは、道路が南から北への登り坂となっており南に下るほど削られて、北へ上るほど盛土されているためである。ちょうどこの転換点は、調査時のEトレンチより北であって、北に行く、E・F・Gのトレンチは、遺構の保存が良好であった。ただし、A・B・Cの各トレンチには、流出した土層中に、円筒埴輪片を含んでいる。

Dトレンチ・遺構はわずかに残り、約120cm下まで攪乱層を見ることができ、埴輪の小片を多く見ることができる。

Eトレンチ・中央部で幅1mの旧道があることを確認、この旧道面直下に、最下段のみを残す。地山を掘り込んでからすえられた楕円形埴輪を見ることができた。又小型五輪塔の火輪・風輪の部分のみをまとめて投げ込んだ部分が存しており東方台地上よりの投棄物であると考えられ、台地上には墓石の一部もちらばっている。この面において時期不明の握りこぶし大の川原石を敷きつめた部分があって掘割りを形成する遺構であったが、断定できなかった。埴輪の位置より西に葺石の列を見ることができこの隔りは、180cmあった。

Fトレンチ・後円部が最も東に突き出した部分に開けたもので、葺石基底部石列をかるうじて東壁ぎりぎりの所で検出できた。断面は西に行くとき地山を露出させ自然地形を切断して古墳を整形した様子がよく分かる。基底部は、30cm～20cm大の川原石を使用しており、Eトレンチと同様である。

Gトレンチ・全トレンチの中で最もよく葺石が保存されていた所である。基底石は、地山をわずかに掘り込んでからすえられ、背の面地山を墳丘に合せて削り、その面に叩き込むようにして、下から上へと石を組み上げている。断面は、始め二段墳丘部より流出した埴輪を含む褐色土によって埋められ次いで東側よりの強い土砂の流入がみられる。この部分で図一8、写真一7で示した楕円埴輪を発見、基底石より、1.5m東側で、地山を掘り込んで置かれている下第一帯より上には、全面に朱が付着しており保存も良好と思えた。

V 遺 物

第7図に示したごとく、埴輪以外の遺物は、すべて中世、近世のものである。図示したのは中でも実測可能のもののみで、図示できぬ遺物は表にまとめた。

- 1・瓦器製の羽釜で室町時代初頭頃に多く見られるもので、瓦器碗の出土と合せ考えると理解できる。破片。
- 2・3・4は、土師器皿で灯明皿として使用された痕が残っている。近世期。
- 5・灰色粘土と微細な貫入の多く入った陶器。近世期？
- 6 から以降は、硬質花崗岩製の五輪塔の一部で、形より見て、近世を逆登るものであるとは考えられぬ。惣墓の遺物と考えている。

図一8に示したのは、Gトレンチ内で採集した楕円型埴輪で、復元すると第4段までの突帯をめぐる事が分かった。直径の長軸で44.5cm、短軸で31.9cmを計し、胎土は非常に微細な砂粒を含む粘土、焼成は良、特記すべきは、下第1突帯より上に朱が施されており、墳丘の回りに立て並べてから朱をつけたことが分かる。ハケメの施し方も第1突帯までは縦方向に1cm17本を計するもので、第2段より上は、右さがりの調整になっており、突帯を付ける前にやっている。ハケメ調整の後に突帯をつけ、横にナデをして成形している。また、第1突帯より上で、粘土紐のまき上げ手法を行なっていることも観察できる。他にもう一点同一の最下段のみの埴輪があるが、結果は同様である。又埴輪はすべて魚のウロコ状に縦割れする。この他に墳丘で採集した埴輪の中には、円型スカシを入れるものも存在していることが分かった。少くとも二種の埴輪が存在して、墳丘の外周をめぐる形で赤く朱色に光り輝いていたと考えている。ただ各墳丘上から検出されたものではないので、外周部と墳丘上の埴輪の上に若干異なった性格を有しているようで中心主体部周辺の調査が必要であろう。

VI 小 結

今回の発掘によって墳丘の最下段の葺石列を発見、その基底石より外1.5m~1.8mを隔てて朱ぬりされた楕円形埴輪列の存在したことが、従来東側舌状台地が自然地形を呈していると考えられていたのが意外に古墳が東より埋められていたことを明らかにした。これによって少なくとも埴輪の位置を含めると前後、両サイド2mづつ古墳が広がることとなり現在の道路は完全に古墳の一部を破壊して通じている。そして最下底の土層観察によると粘土等の水平堆積が認められないので水堀のような周溝は存在せず、堀割程度のもので存在していたと考えてよい。現状の表面観察では、最下段葺石を含め三段階の段丘になっていたと思われる。さてもう一つ新たな発見で、楕円形埴輪がある。従来この車塚古墳の時代を決定するのに後円部の主体から出土した三個の特殊な鋸歯文形刻文のある石訓や合子、車輪石等の存在を元にして考えて四世紀後半と位置付けられていたが、もう一つ編年を考える上で重要な埴輪が入手できたことである、これを考えると4世紀末から5世紀初頭と考えられそうである。ただ玉類についても田辺町興戸寿命寺山古墳付近出土のものと同様にして、あまりすぐれた材質と言えない面をもち、丹後カヅヤ古墳出土土鍬形石等の比ではないように思える。玉類に付いても合せて収録する予定であったが今回は未収に終り、収録の用意をしている。

ここでかつての車塚古墳の調査歴に触れておこう。明治35年に後円部が盗掘を受けた時に収集された遺物と聞き込みを『京都府史跡勝地調査会報告 第二冊』に梅原末次博士が報告された。報告によると、飯岡東側に位置するトヅカ古墳についても記載されており、遺物は京都国立博物館に保管されている。両古墳共梅原氏自身による発掘ではなく、遺物観察と「聞き込み」が主体となったらしい。ただ、墳丘自体の現状、実長、表面観察を示しておられる。「全山ヲ葺ル礫石随所ニ存スルモ埴輪片ヲ見当ラス」と示して。玉類は以下のようにまとめられている。

勾玉	4個	石訓	24個・破片1個
車輪石	4個1包	鍬形石	1個
小玉	1個	管玉	24個
脚附小形埴破片	1個		
刀剣	破片1包		

ただ鏡類を発見せざりとしておられる点が残念である。後梅原氏は、『日本古文化研究所報告』に、玉類についての詳細を述べておられる。その写真、拓本によってだいたいの所を推測できる。以後これを大きく歩み出す調査は長く加えられなかったが、中間的なものに田辺町郷土史会の調査があり、もう一つは、南山城の前方後円墳の測量を中心とした集大成がある。昭和47年に公表された竜谷大学文学部考古学資料室が出した『南山城の前方後円墳』がそれで、梅原氏以来の研究を大きく出た成果であった。以上までで気付くのは、トヅカ古墳から出土した遺物との隔りて

ある。

中国製銅鏡 3面 硬玉製管玉 2個
碧玉製玉 小玉 刀剣 馬具類

以上と大きく異なるのは、鏡の存在、玉類の少なさである。これは椿井大塚山古墳から多量の鏡が出土したにもかかわらず玉類が出ないことと、平尾城山古墳に多い玉類の存在は何を示しているのであろうか。そして従来トヅカ古墳が円墳であると言われていたが、最近航空写真を見ると前方後円墳と見えるらしく、もし、前方後円墳とすると車塚古墳とは対になる位置を示し、かつ、この4つの古墳が示す事実は、重要なことを物語りそうである。

さて目をもう少し、山城盆地に置くと、巨勢池という湖によって、古墳時代は分断されていた。この湖を境に北と南は独自性を持ったようである。初期稲作農耕文化は、まず長岡丘陵に沿った桂川流域に展開し、その第二波として南山城の開発がなされたと言える。この弥生文化以後、農耕社会がいかなる発展を見せるかは興味のある事柄である。これを裏付ける手助けになるのが古墳である。ましてや日本の古墳時代の研究の中心と言うべき椿井大塚山古墳が存在する地域の研究が遅れていると思えるのは、私ばかりではないであろう。例えば、古墳と集落の関係や、多量に製作された埴輪の製作跡等の研究は私達に課せられた大きな課題であり、少しづつ整理してゆく用意はしている。

最後に出土遺物の中で楕円筒形埴輪についてふれておく必要があろう。埴輪の起源と発展を考える上でこの古墳出土の埴輪は最古のものであるとは言えず、むしろ古墳時代前Ⅱ段階に位置している。特に逆三角形の透しは、この地方出土の四角透し埴輪と合せて興味ある点で他と異なる所である。

埴輪の研究には諸々の通説が存在しているが、最近の活発な調査は、従来知り得なかった新事実を提供しつつあり不明であった点が解決されつつある。戦前における埴輪の研究は、人物、象形埴輪に向けられており円筒埴輪は土止め説まで返り見られることが少なかった。ただ後藤守一氏は、埴輪の意義を、墳墓の飾だけでなく、人物、動物、器財の類を死んだ豪族の葬列を表現したものと考えておられた点を評価すべきであろう。戦後の研究は早い時期に、畿内と岡山においておもに円筒埴輪の研究を中心として発展した、畿内では、桜井茶臼山古墳の調査によって布留式土器の底部を開口させた壺の存在が明らかになった事でこれが朝顔形埴輪の起源と考えられた所に出発がある。他方岡山地方では、上東式の土器や、弥生時代末と考えられる遺跡（方形台状墓）中に、特殊器台がありこれが同地方だけのものであり類別を発見できない特徴を多く有し、かつ、埴輪との共通性を多く伴う点等で重要であると考えられた。この二つの起源がいかなる合理的結合によって結ばれたかの接点をもとめることによって研究が進んできた。

最近この接点にかかわる発見が奈良県箸墓古墳においてなされた。ただその発見遺物が前方部と後円部では異なる点の問題で前方部特殊壺の存在は、追善供養の結果であると考えられるが、布留式土器と供伴した時期に流入されたものとして重要である。少なくとも畿内前期大形古墳

(前方後円墳)の中に並置された事実は見逃せない大きな点である。もう一つ吉備地方と重要な関係を有する問題として、直孤文がある。この点を最も適切に示す発見が纏向遺跡でなされた。直孤文の発生は、どうも岡山地方にあったらしく、同地方の弥生時代にその例を見ることができ。従来は古墳時代に限定して考えていたのであるが、私はこの地方に発達した弥生時代以来の伝統であるヘラ描土器の継承の過程で線刻土器・直孤文の発明に至ると推察している。今問題にする飯岡車塚古墳の円筒埴輪は、特殊器台で完成され、畿内に持ち込まれて前期Ⅰの古墳に使用された後に簡略化して前期Ⅱの古墳をへて、円筒埴輪に至り終るのである。この中間過程を示す当車塚古墳の逆三角形の透しは、数少ない発見であったと言える。

注1 四角透しを供なう例は、「日本の美術19はにわ」三木文雄氏に、田辺町出土として実測図がある。精華町薬師山より太田直一氏が発見したのはにわもこの例と同様で、筆者は実見している。

参考文献一覧

- | | |
|--------------------|-----------------------|
| ① 京都府史跡勝地調査会報告 第二冊 | 大正9年6月 京都府 |
| ② 近畿地方古墳墓の調査三 | 昭和49年12月復刊 日本古文化研究所 |
| ③ 南山城の前方後円墳 | 1972 竜谷大学文学部考古学資料室 |
| ④ カジャ古墳発掘調査報告書 | 1972 峰山町教育委員会 |
| ⑤ 世界考古学大系(日本Ⅲ) | 昭和50年11月2刷 平凡社 |
| ⑥ 古代史発掘7(埴輪と石の造形) | 昭和49年10月 講談社 |
| ⑦ 日本の考古学Ⅳ(古墳時代 上) | 昭和41年6月 河出書房新社 |
| ⑧ 書陵部紀要 第27号 | 昭和51年2月 宮内庁書陵部 |
| ⑨ 古墳の航空大観 | 昭和50年1月 末永雅雄著 学生社 |
| ⑩ 古墳の埋蔵文化財 | 昭和47年11月 京都府文化財保護基金 |
| ⑪ 論集日本文化の起源 1 考古学 | 昭和46年2月 編集小林行雄・平凡社 |
| ⑫ 纏 向 | 昭和51年9月 奈良県立橿原考古学研究所編 |

飯岡車塚出土遺物観察 表1

器形	NO	法量単位 cm	形態上の特徴	製作上の特徴	その他備考
羽釜	1	口縁器高不明	5.9 口縁は内にやや斜めに凹面を持ち羽から口縁にかけては1/4円状に立ち上り稜をなす。また羽部先にもやや凹面をなす。	外面羽部より上は指ナデ下部は指圧の後淡くナデを施す 内面横ナデ布か?	色調暗灰白色胎土良焼成良瓦質中世 Eトレンチ出土
皿	2	口縁器高	6.8 1.0 ほぼ平らな底部よりゆるやかに外彎しながら立ち上る。	内面ナデ底部指圧痕体部から口縁部にかけて横ナデ	色調白褐色胎土 0.8~1mm大の砂を含む焼成やや軟質口縁部にスス附着土師質中世か。 Eトレンチ出土
皿	3	口径器高	9.6 1.7 やや丸味を持つほぼ扁平な底部よりゆるやかに外彎して立ち上り口縁は丸く終る。	いわゆる手づくねにて、形を整えた後、布(?)により「の」字の方向にナデを施す。	色調淡褐色、胎土、焼成良好、完形、土師質 Gトレンチ出土
皿	4	口径器高	10.7 2.2 丸味を持つ底部よりなだらかに外彎して立ち上り口縁は、丸く終る。	いわゆる手づくねにて形を整えた後、布(?)により「の」字方向にナデを施す。底部には指圧痕を残す。	色調白褐色、胎土、焼成良好、完形、土師質 Gトレンチ出土
皿	5	口径器高	8.7 2.2 ややくぼんだ底部から稜なしで、ゆるやかに外彎しながら口縁となる。内面はゆるやかにそのまま底となる。口縁近くに円形貼付浮文その反対側に櫛描き文を施す。	外面に水引き痕を有するが糸切り痕は、消しされている。口縁近くには内面と同時に施されたと思われる横ナデが認められる。内面には、釉をかけてある。	色調白色 胎土焼成良好 1/2 残・陶器
宝珠請花	6	高さ宝珠最大径 請花最大径	20.4 12.5 13.3 比較的大きな先端部から下ぶくられて、請花と接合する。請花肩部は、傾きあまり稜を成さずに体部となる。	一石彫成にて宝珠と請花が作られている。形を整った後研磨された痕はない。	花崗岩製 Gトレンチ出土
宝珠請花	7	高さ宝珠最大径 請花最大径	21.2 14.2 15.2 小さな先端部が大きく広がりずんどりとした体部を持つ接合部は鋭く曲る。請花肩部はゆるい傾きをなして、ゆるく体部へと続く。	同上	同上
宝珠請花	8	高さ宝珠最大径 請花最大径	30.4 17.6 18.2 やや大きい先端部から広がった体部はずんぐり長く、請花は全体的に丸味をおびて、突出した笠への「ほぞ」を持つ。	同上	同上
宝珠請花	9	高さ宝珠最大径 請花最大径	27.3 比較的小さい先端部よりゆるやかに丸味を持ち接合する。請花はほぼ水平な肩部よりすどく稜をなして、体部となる。	同上	同上
塔身	10	高さ最大径	21.2 26.4 笠との接合部には扁平な「ほぞ」が付き体部は中間部で最大径をとるようにして座部となる。	形を整えた後、研磨された痕はない。	同上
塔身	11	高さ最大径	21.6 26.3 笠との接合部にはやや突出した「ほぞ」を有し体部はやや下ぶくれにして底部となる。	同上	同上

飯岡車塚出土土器観察 表2

出土した土器類のうち、実測出来る物については、観察表1に示した通りである。ここでは、それ以外の土器のうち比較的土器の特徴をよく保っているもののみを書きとどめる次第である。他に埴輪片が214個、須恵器片3個、羽釜片150個、瓦器片8個、土師器片40個、瓦片1個、陶器片4個、染付2個がある。

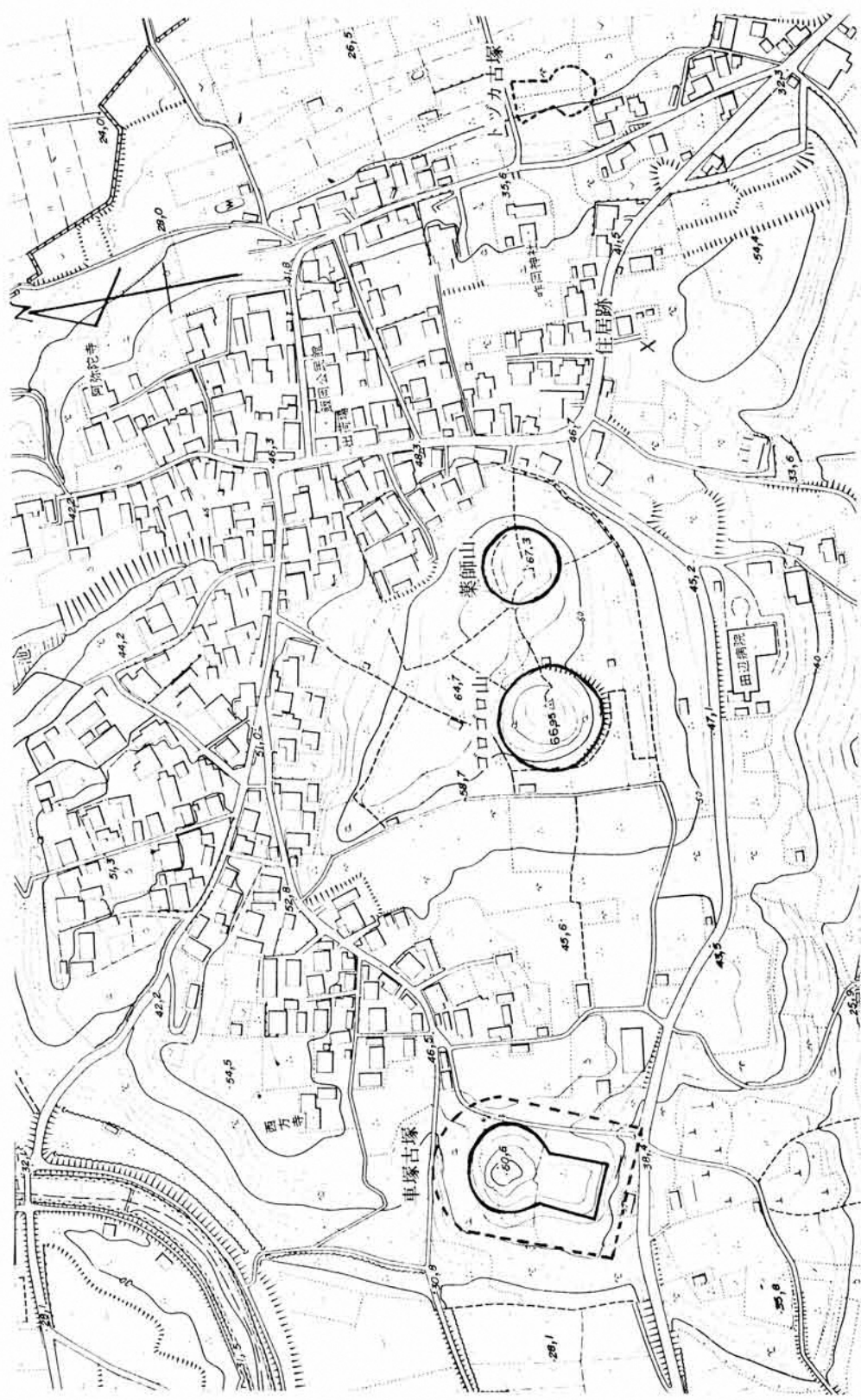
器形NO	法量単位 cm	形態上の特徴	製作上の特徴	その他備考
埴輪 1	厚さ 1.2 たが高 1.9 巾 1.4~1.8	たがより2.7cmの所に丸型あるいは、かまぼこ型となるすかしがある。	内面は、横ナデ外面はたてにナデを施す。	色調白褐色胎土 0.3~2mm大の砂を含む。焼成良好 Eトレンチ出土
埴輪 2	厚さ 1.9		外面は、巾1cmに16本の刷にて下から上に向けて調整され内面には横ナデが施してある。	色調黄褐色胎土良 0.2~2mm大の砂を含む。焼成良 Gトレンチ出土
埴輪 3	厚さ 1.9		横に巾1cmに7本の刷にて調整の後同じ刷にて、たてに施す。	色調淡黄褐色胎土1~3mmの砂を含む 焼成良 Gトレンチ出土
埴輪 4	たが言 1.9 巾 1.0~2.2		指ナデにて貼付け部をおさえる埴輪表面に刺突は行なわない。	同上
埴輪 5	たが高 1.2 巾 1.4~1.6		たが部に指ナデを施す。	色調黄褐色 胎土 0.5~1mm大の砂を多く含む。 Dトレンチ出土
羽釜 6		羽部取り付け部分よりゆるやかに内彎している羽部はやや下向に下ぶくれにて終る。羽下側にスス付着。	羽部にはていねいに横ナデが施され、接着分では指によるおさえ痕を有す。内面の刷目は刷目とナデを淡く施す。	色調淡黒青灰色胎土 精緻焼成良瓦質中世 Eトレンチ出土
羽釜 7		口縁は内側にやや高く凹面を有し羽はほぼ水平に付いているが近世のものに較べて小さい。体部はしだいに薄くなり外面にはススが付着している。	内面ナデ外面部より上は横ナデ下は指圧	色調灰黒色胎土 0.2~0.5mm大の砂を含む焼成良瓦質中世 Eトレンチ出土
羽釜 8		羽は接合部分でやや厚さを増ししだいに薄くなるが端にふくらみを生じ突端に凹線を持つ。	内面刷、外面横ナデ	名調内面黄褐色外面 黒褐色胎土良好焼成 やや軟 中世 Eトレンチ出土
羽釜 9	羽部2.4×0.6	口縁はやや内彎して終ると思われ羽部は中間部分で小くうみを生じやや下方に傾いて付く。	全面に強い横ナデを施す羽部は貼り付けであるが接合面は横ナデを施すのみである。	色調白褐色胎土 0.2~0.8mm大の砂を多く含む焼成良土師質近世 Gトレンチ出土
羽釜 10	羽部2.6×0.7 ~1.2	羽部は中間部分でふくらみを生じてやや下方に傾き先端は丸く終る。	外面はていねいな横ナデ、内面はよく磨かれている。	色調黄褐色胎土 0.2~0.5mm大の砂を含む焼成良土師質近世 Eトレンチ出土

瓦器碗	11		三角形をなす低い高台よりやや厚さを増しながらゆるやかに外彎しながら立ち上り口縁は丸く終る。	内面はナデの後暗文を施し外面は口縁下1cm前後まで横ナデを施し体部には指圧にて調整を加える。底部は貼付け高台で周囲に指ナデを施す。	色調淡黒青色胎土精微焼成良白石編年第6か第7型形式に相当すると思われる中世Eトレンチ出土
碗 ?	12	不明	外面に鎬葉文を施しその先端部より「く」字に開き口縁となる		色調青緑色胎土焼成良好 中国製か？ Gトレンチ出土
茶 碗	13	口縁径 7.5 器 高 5.4	厚い底部からなめらかに立ち上り丸く口縁を淵どる。高台が付く。	全面に淡く上釉がかけられてあるが、水引痕がかすかに認められる。	色調淡い白青色胎土焼成良1/4残 Gトレンチ出土
插 鉢	14		底部より強い刷目を施す。	底部未調整外面横ナデ	色調赤褐色胎土焼成良 Dトレンチ出土

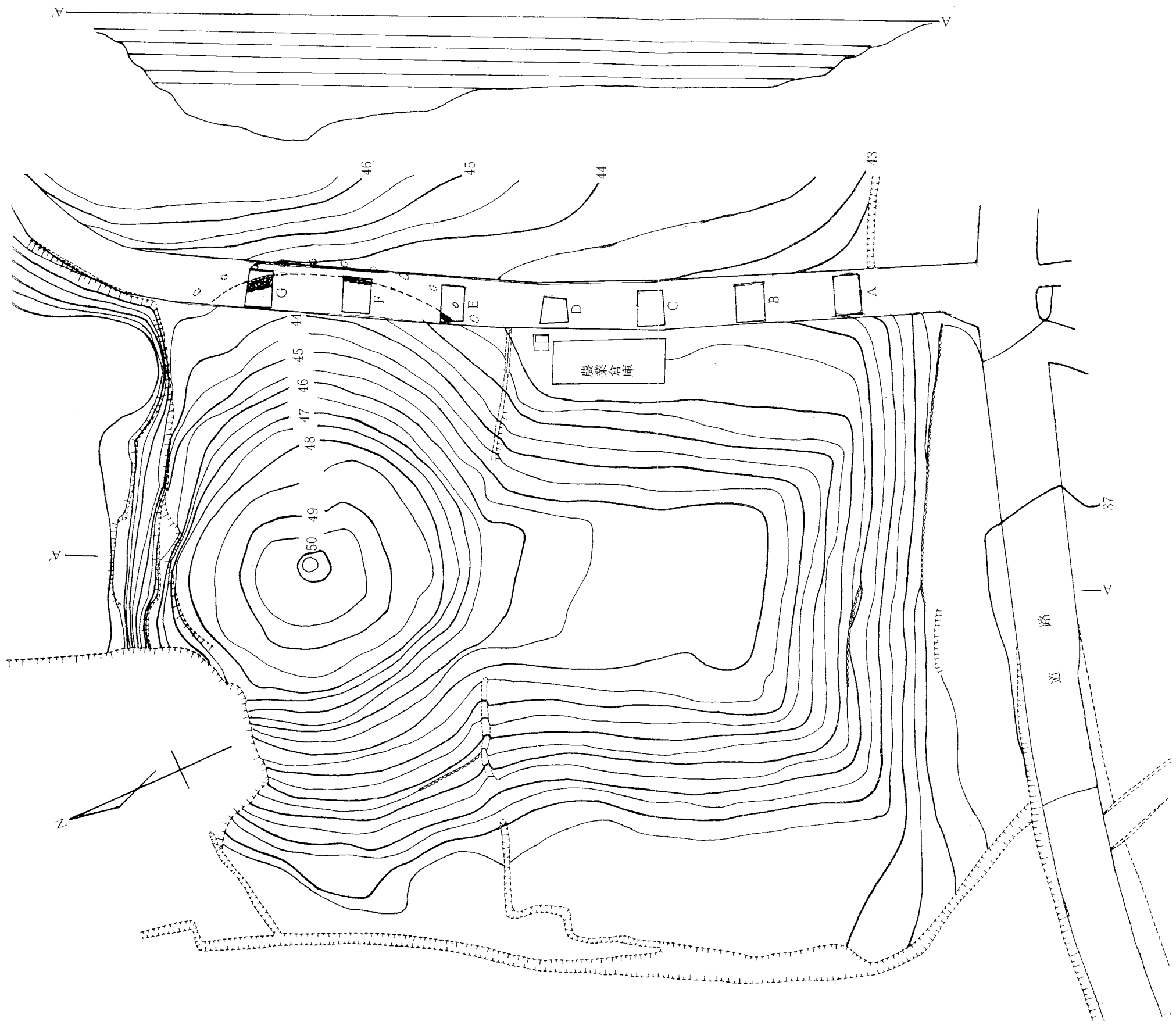
圖 版



第1圖 飯岡車塚古墳之周辺遺跡 S = 12,500

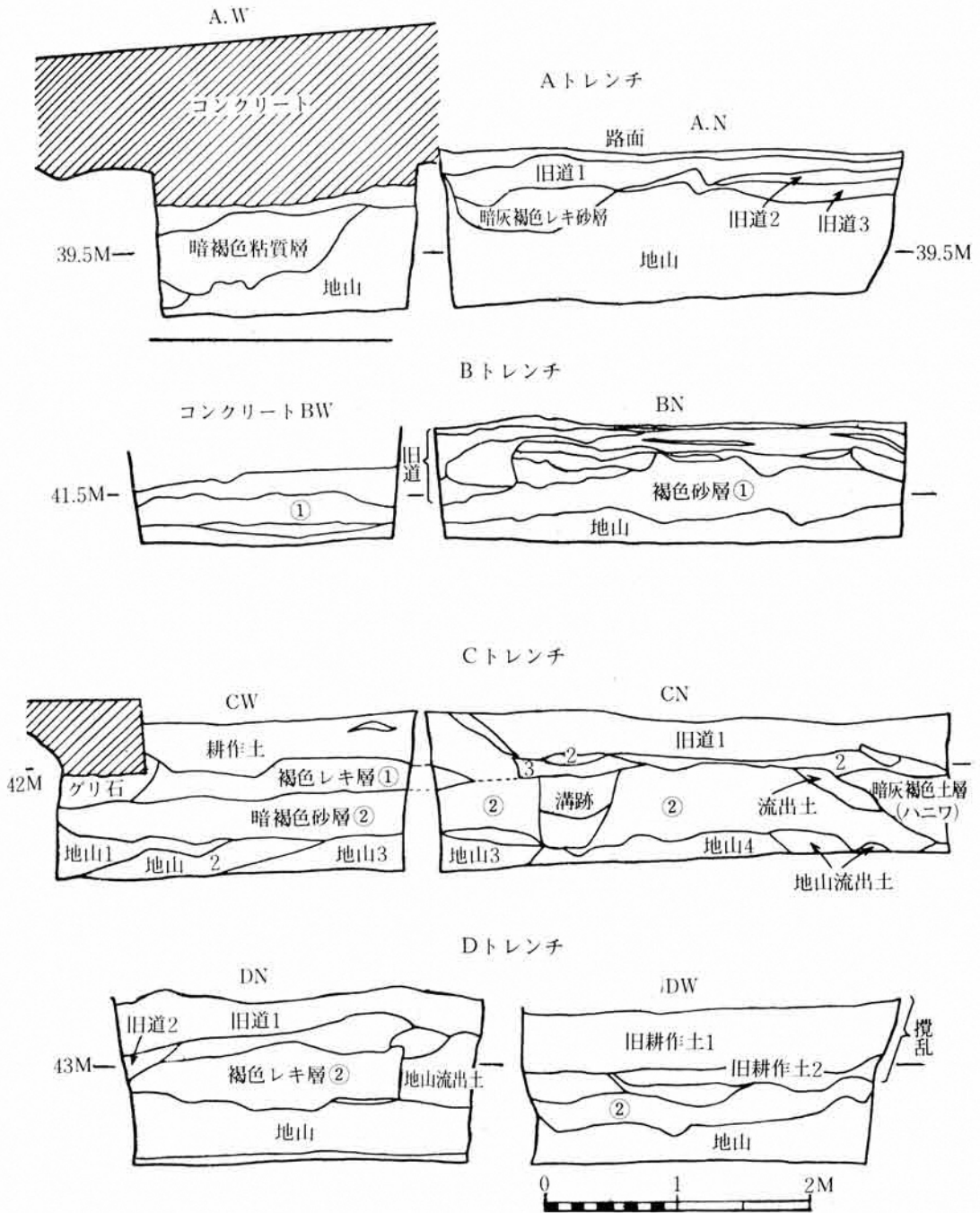


第2図 飯間遺跡図 $S = \frac{1}{2500}$

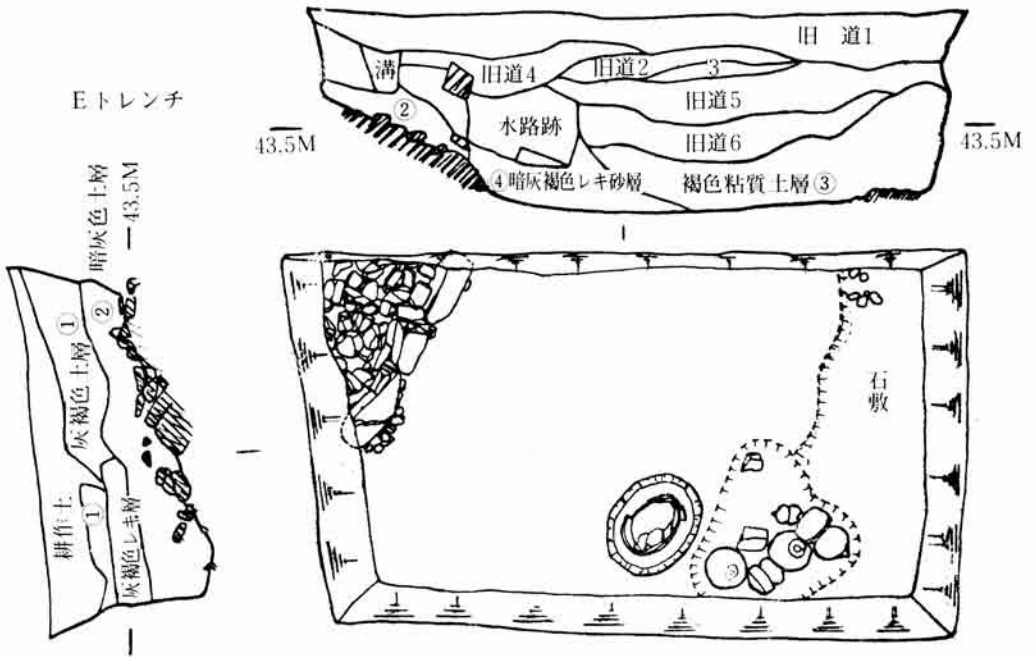
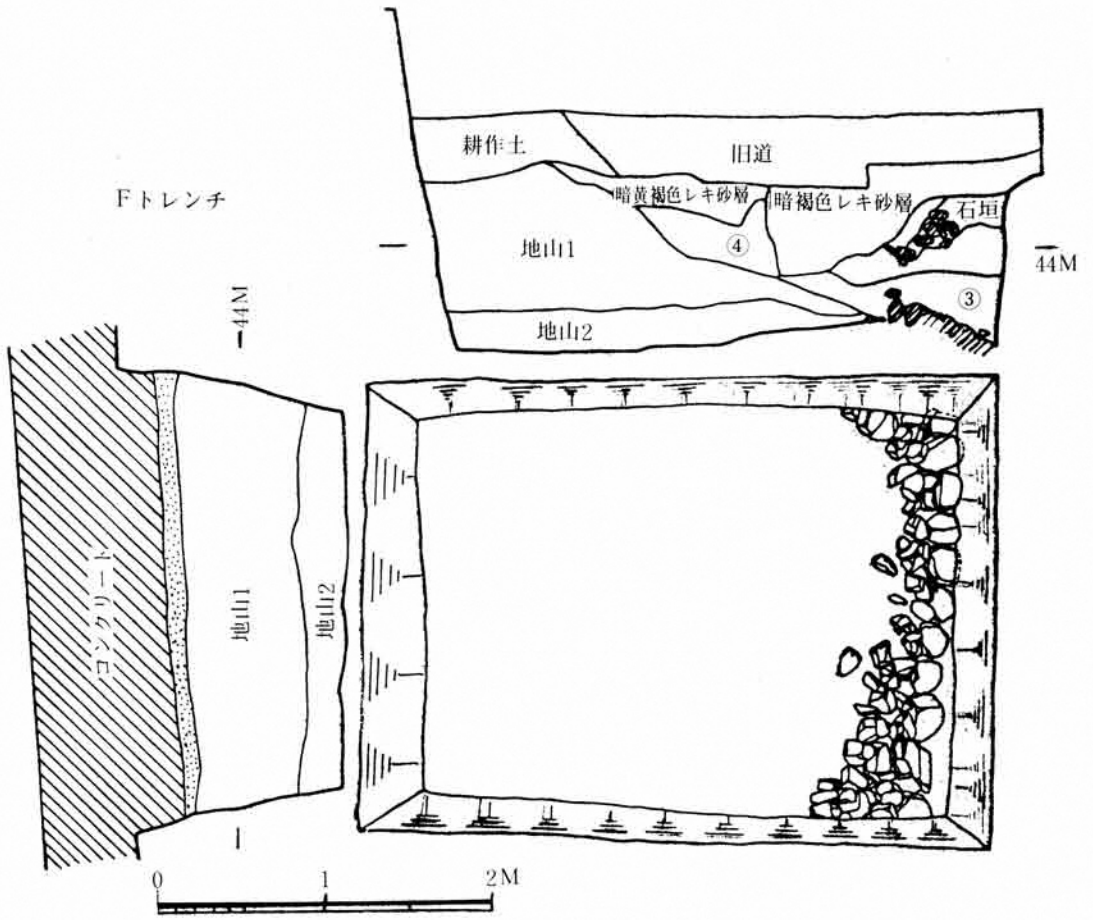


第3図 飯岡車塚古墳位置図 S = 454

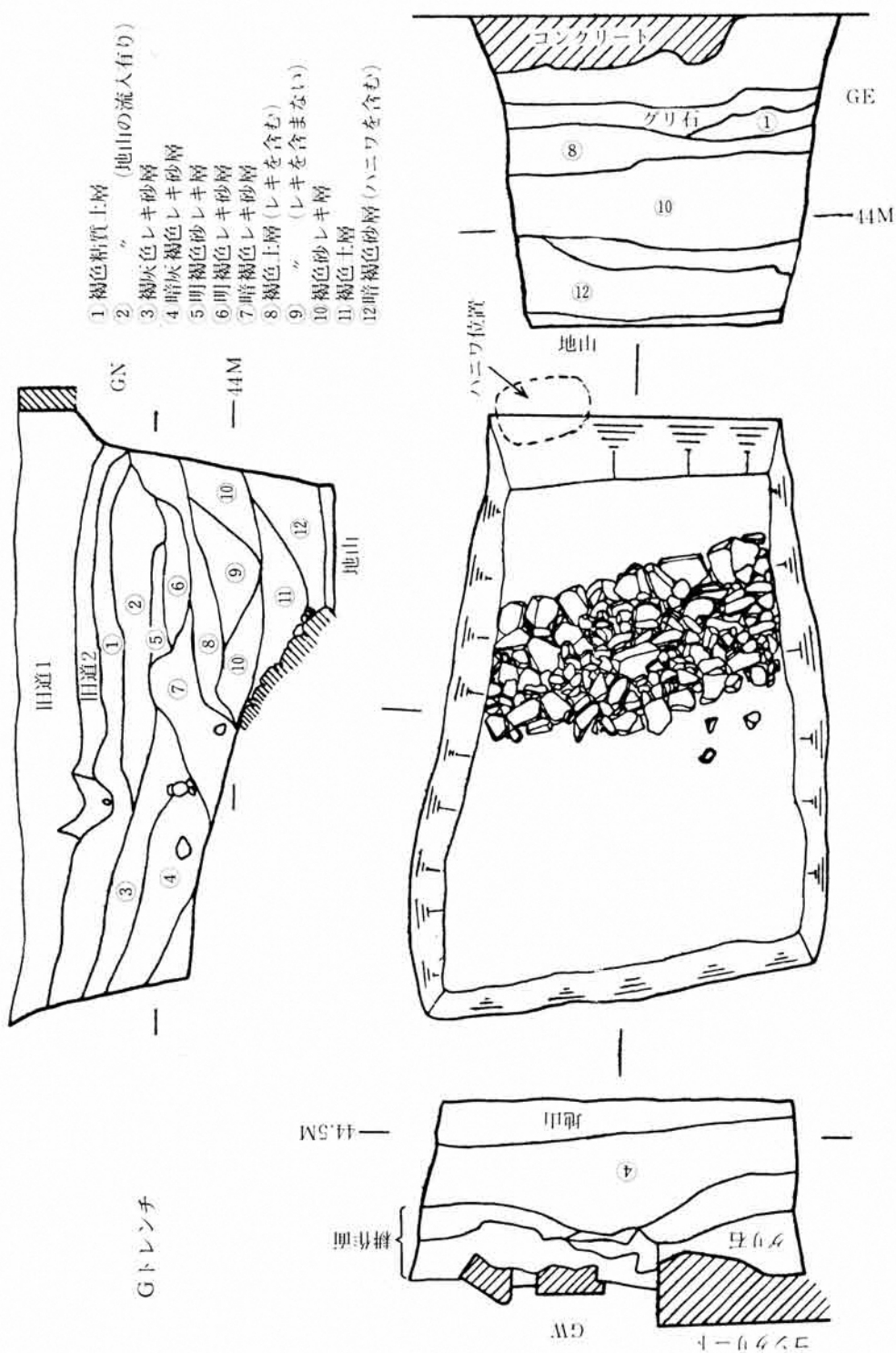
0 10 20 30M



第 4 図



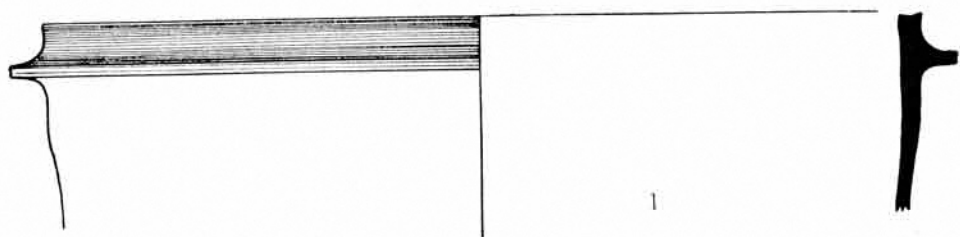
第 5 図



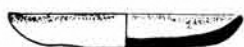
Gトレンチ



第 6 図



1



2



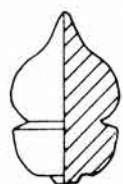
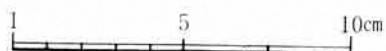
5



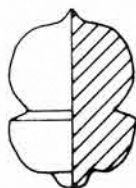
3



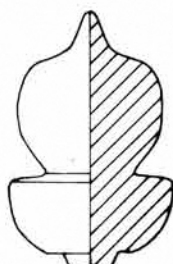
4



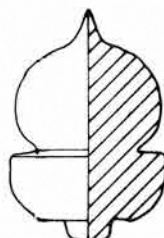
6



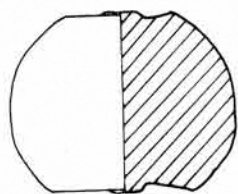
7



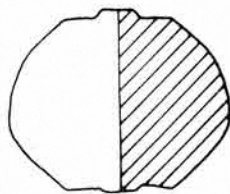
8



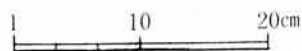
9



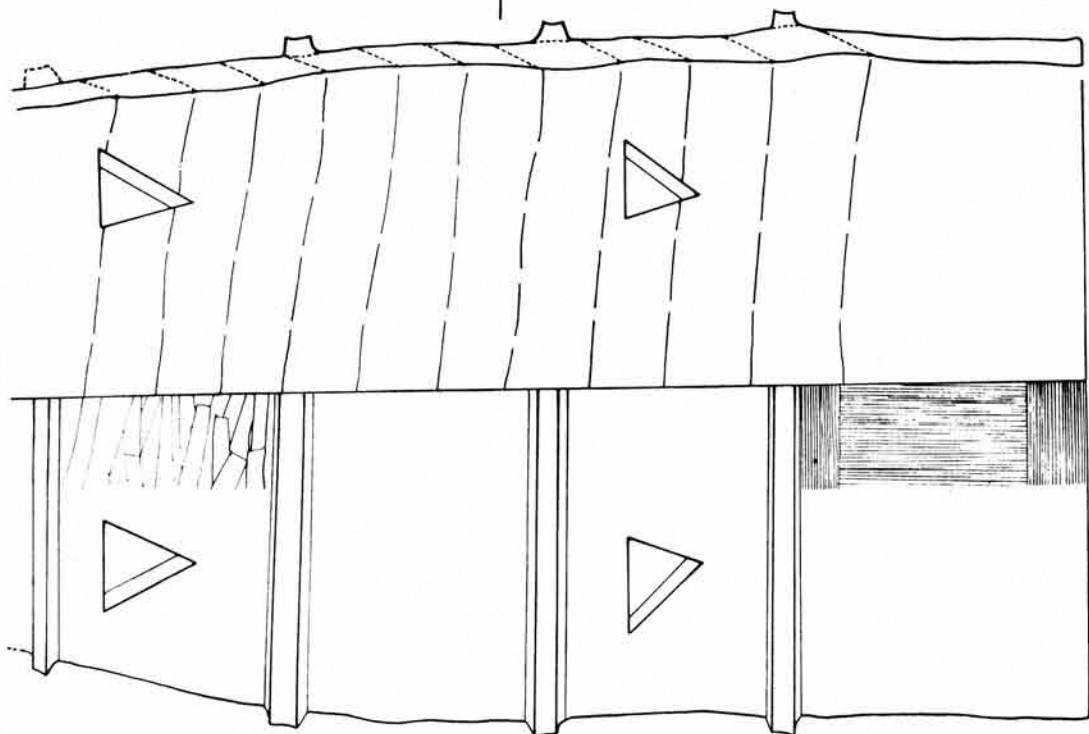
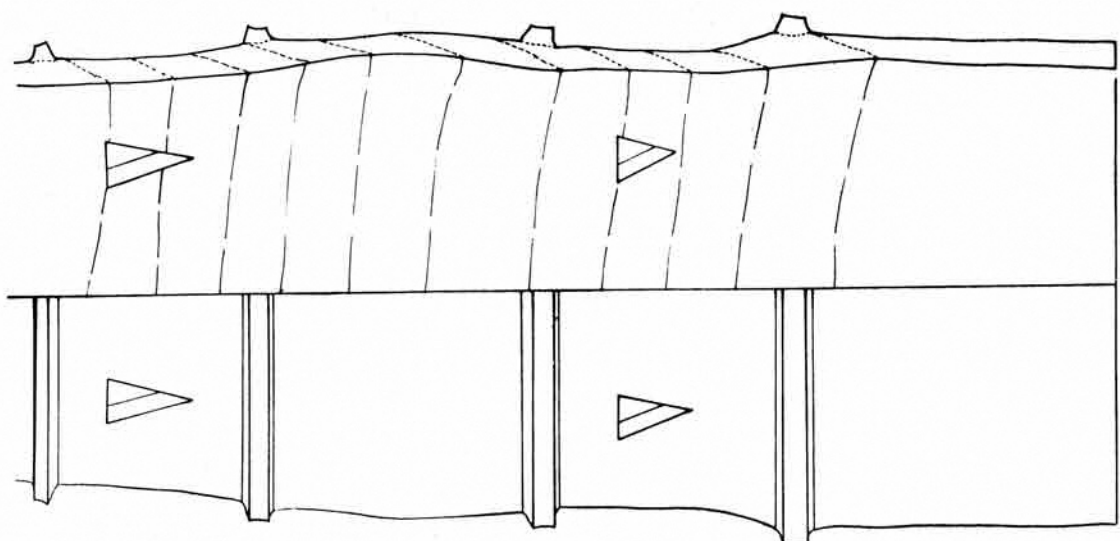
10



11



第 7 图



第 8 图



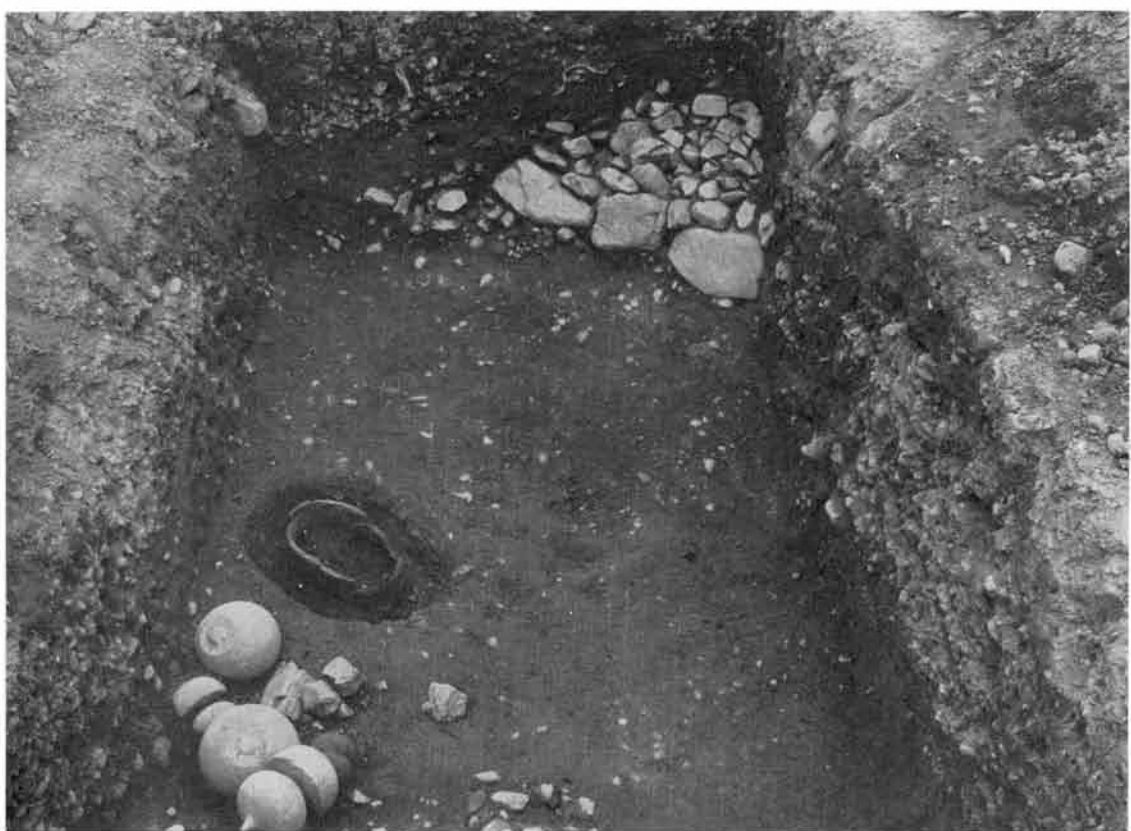
発掘前北側より



発掘時南側より



A トレンチ



E トレンチ



E ト レ ン チ



E ト レ ン チ 埴 輪



F トレンチ 葺石列



同 上



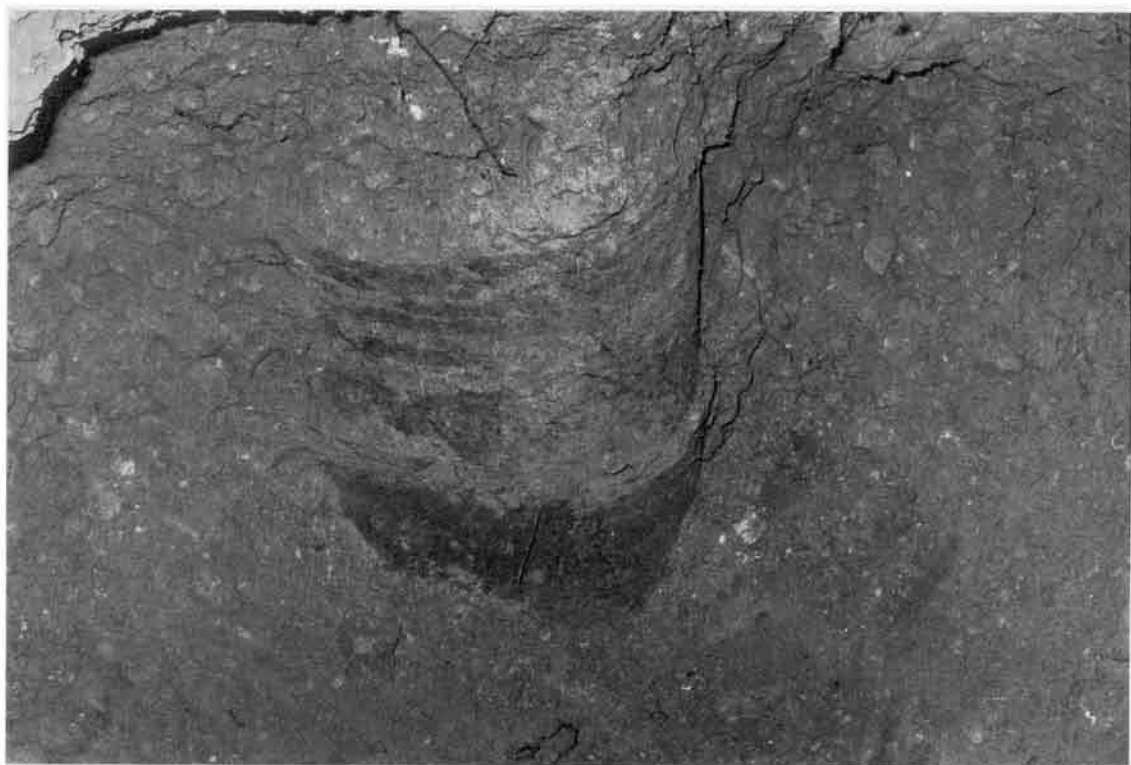
G トレンチ 葺石



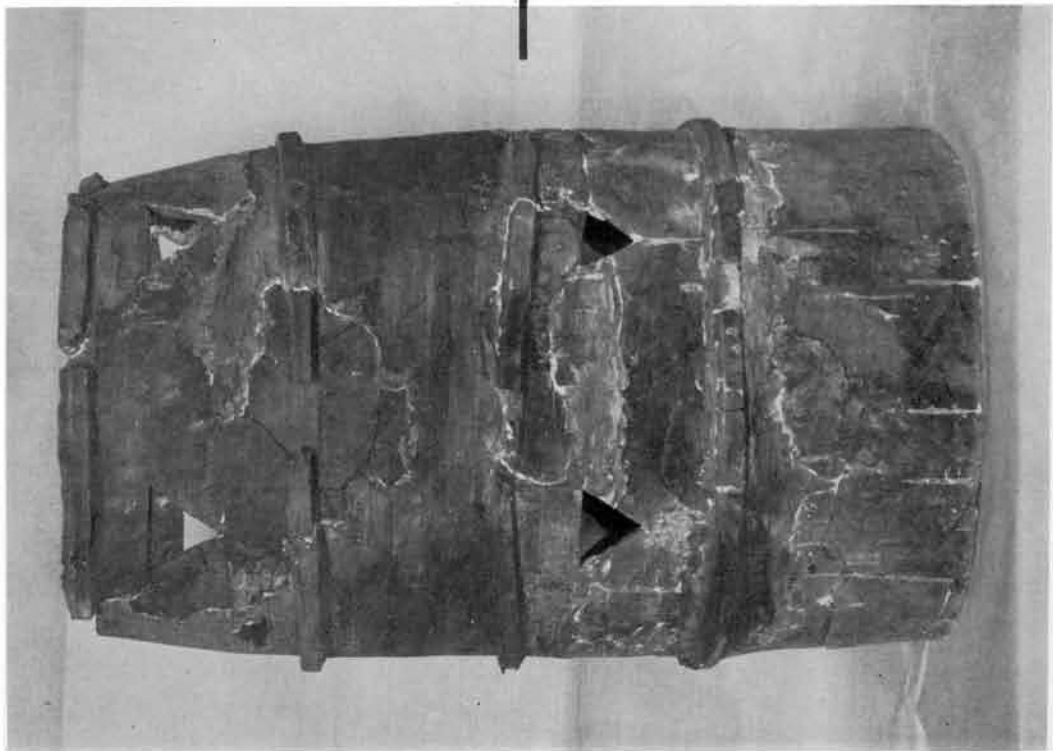
同 上



Gトレンチ葺石組



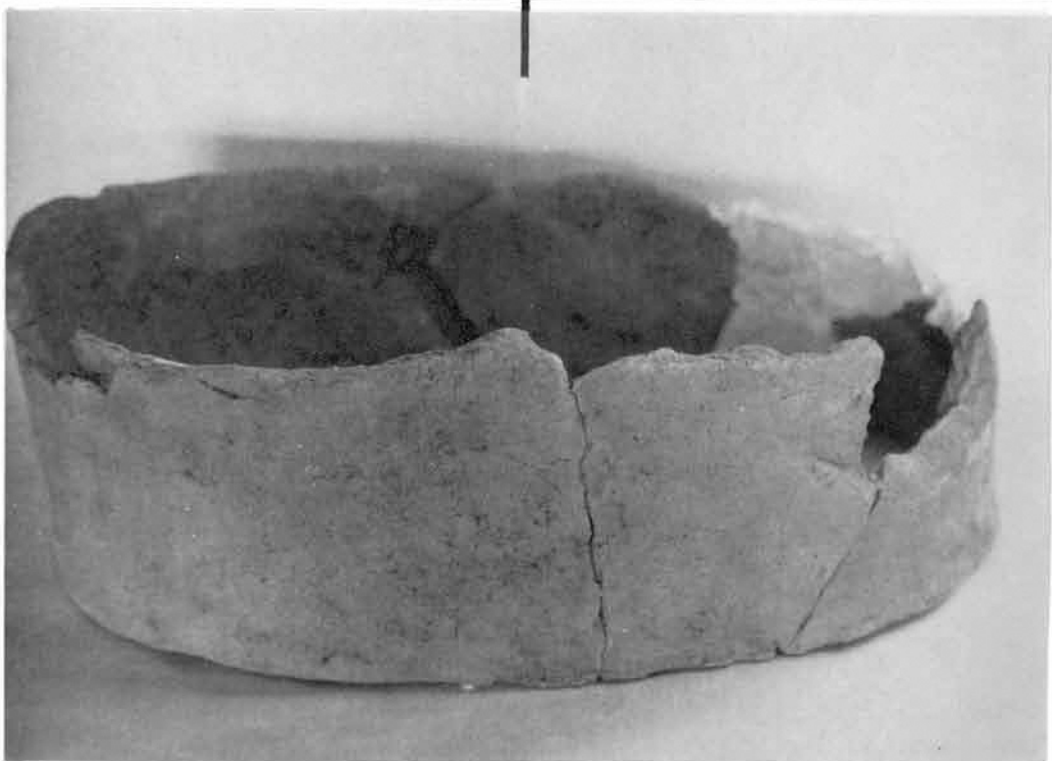
Gトレンチ埴輪出土状態



輪 填 土 出 チ ノ フ ト G



Eトレンチ出土埴輪 側面



正面

飯岡車塚古墳発掘調査報告

1977年3月31日 発行

発行 田辺町教育委員会

編集 綴喜古文化研究会

代表 吉村正親

印刷 中西印刷株式会社